

Title	ウィンタボーンへの視点 : H. ジェイムズ 'Daisy Miller' 考
Author(s)	西前, 孝
Citation	Osaka Literary Review. 15 P.79-P.91
Issue Date	1976-12-25
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25651
DOI	10.18910/25651
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

ウィンタボーンへの視点 —— H. ジェイムズ ‘Daisy Miller’ 考 ——

西 前 孝

I

周知の如く、ジェイムズを語るときに必ず用いられる主要な概念の一つに ‘international situation’ というのがある。「国際的」ということの意味は、「アメリカ対ヨーロッパ」或いは「ヨーロッパにおけるアメリカ人」という対照のことである。初期のジェイムズは——中期を経て後期に至って再び彼はこの問題に取り組むことになるのだが、それは当分の課題ではない——いくつかの長編や短編の中でこの問題を取り上げている。長編『ロデリック・ハドソン』がその方面での早い成功作であったことが、生い立ちと少年期の経験とから来る「国際性」に対して殆んど決定的な自覚を呼び起こす刺激となったことは確かである。実際この長編の成功に自信を得て彼は1875年、ヨーロッパ永住の夢を抱いて大西洋を渡ったのだ。そしてヨーロッパでものにした長編『アメリカ人』もまた彼の「国際的」関心の一つの産物だった。その後ここに論じる『デージー・ミラー』が上梓された1878年までの間に5編ほどの短編を発表してそのいくつかに於てこの方面への関心の強さを示しているが、『デージー・ミラー』の成功に至ってジェイムズは、国際的テーマの ‘master’ と呼ばれる確かな第一歩を記したのであった。¹⁾

「アメリカ対ヨーロッパ」或いは「ヨーロッパに於けるアメリカ人」という図式は、ジェイムズ評価の上での概括的な大前提ではある。勿論話はここで終わるのではない。むしろここから始まる。この枠組を一応認めた上で、更に個々の具体的な作品についての新たな分析とそして総合とが求められているのである。

例えばこういう評価がある。女主人公デージーはヨーロッパの因習的道德の毒牙にかかって滅んだ、という。汚れを知らぬ innocent なアメリカ娘が、その無邪気さ故に、ヨーロッパ文化がその裏面に持っているところの因習的道德の悪弊の前に破れるというこの物語は、一方でヨーロッパへの批判の刃を揮るい、返す刀でアメリカ的無知と浅薄を切ったのだと言えるわけである。確かにこれがこの作品への一般的理解であろう。少なくとも「国際的状況」という観点から見たときの、むしろ最もまともな評価である、と言わねばならない。

しかしまた、少し違った見方も為されている。既に例えば C. P. Kelley が言っていることだが、²⁾最近では Auchincloss は次のように指摘している：

The essence of the story lies more in her innocent naiveté than in her exposure to Europe. The drama of the story lies in the opposition of ³⁾Americans to Americans, not Americans to Europeans.

ヨーロッパ社会の道德というよりむしろ、ヨーロッパに暮らすアメリカ人たちの因習の毒手にかかったというところである。「ヨーロッパに居るアメリカ人」の意味がここに新たに付け加えられたことになる。つまり、ヨーロッパに余り長く居すぎて、そのために祖国アメリカを忘れ、自らの identity をなくしたアメリカ人たちへの批判、という視点が開かれたのだった。そう言えばジェイムズはこれまでもヨーロッパ在住のアメリカ人の identity 喪失の問題に触れてきている。例えば、『アメリカ人』の中のトリストラム夫妻がそうであった。従って、この問題が『デージー・ミラー』においてより深刻なものとなっていると見ることができるわけだ。(序に言えば、後の『ある婦人の肖像』の中のマール夫人やオズモンドもこの系列の人物である。)

更にまた別な見方も為されている。「アメリカ対ヨーロッパ」などの枠を越えて、男と女の問題、普遍的な人間の問題であると。そして更には F. W. Dupee の言うような、「外観と実在」のテーマの現われである。⁴⁾とか、James Kraft の言う「アメリカ人の ideals of greatness and purity

と生の人生の卑しい realities との葛藤である⁵⁾とかがそれである。しかし、そのような普遍性の指摘は具体的な作品の読みをその前提とする。我々は我々の視点から作品を読まねばならない。我々の課題は、ウィンタボーンなる人物を通してジェイムズの国際的関心即ち作者の文学思想上の問題が、視点人物の創造という一見小説作法上の問題と如何に係わっているかを追究し、このことによって、作家の思想と技術との総合への一つの試みを提出することに他ならない。

II

— 1 —

ウィンタボーンはそもそもがアメリカ人である。ヨーロッパ生活が「長すぎる」ほどのアメリカ人なのではあるが、だからと言って完全にヨーロッパ人に成り切っているわけではない。そんなことはそもそも不可能なことなのである。ヨーロッパに居て尚アメリカ人であるという、この二重性こそこの人物の identity なのである。そしてこの新しい意味での identity は、この作品に於けるのみならず、ジェイムズの「国際性」一般に係わる重大事であるだろう。— だが、我々にとっては先ず、ウィンタボーンの持つこの二重性の本質を明らかにする為に、その一方の極である彼の「アメリカ人性」の現われ方を見なければならぬ。

ランドルフ少年との出会いが示唆的である。角砂糖の堅いのを 'har-r-d'⁶⁾と、'r' 音を殊更ひびかせたこの少年のアメリカ英語の特徴の中に、ウィンタボーンは彼と自分とが同国人であるという無意識的な安堵を感じたのだった。それは自分の中に忘れられかけていた「アメリカ人性」を呼び覚ます一つの刺激であったし、その意味でノスタルジックな感傷でもあった。

「アメリカ人性」への覚醒のこのセンチメントは、勿論、このあとに登場する女主人公デイジーとの係わりが担う一つのテーマである。というのも、この二人の関係を支えているのは、彼らに共通の基盤たる「アメリカ人性」に他ならないからである。このことは、例えばすでに、二人の出合

いがランドルフ少年を仲介者として始まっているという一事が象徴している。「アメリカのキャンデー」しか頭の中にはなく、「自分の虫歯はヨーロッパの所為」だと思い込んでいるこの少年が代表しているのは「アメリカ」そのものだからである。加えて、ウィンタボーンが当地ヨーロッパへ連れて来られたのが丁度この少年の年頃だったという彼の回想をここに重ね合わせることによってそのことを補強しているわけである。

ウィンタボーンの中の「アメリカ人性」の展開は、デイジーに対する思いやりという形で進展していく。それは一人の男の一人の女への恋慕であるには違いないが、それより前に我々はこれを、「アメリカ人性」を半ば無くしかけた一人の男がアメリカ的雰囲気⁷⁾を溢れるほどに漂よわせているアメリカ娘の中に感じた恋慕である、と捕らえる観点を忘れるべきではないだろう。

Vevey の町でそれを表現しているのは Chillon 城への行楽のエピソードである。固よりこの城はヨーロッパの歴史と文化の‘monument’⁸⁾である。実際デイジーはその記念碑に対して知的な関心は殆んど示さなかったのだが、そういう無関心をも包み込む形で、今この二人のアメリカ人が向かい合っているのはヨーロッパの歴史・文化であることに疑いはない。逆に言えば、ヨーロッパの象徴たるこの城を対極にしてウィンタボーンとデイジーを結んでいるこちら側の極とは「アメリカ人性」にほかならない。更に、この結合は二人のデートを邪魔するかもしれないヨーロッパ人ユージニオの存在によって一層明確なレリーフとなっているのである。

ローマにやって来る前にウィンタボーンはすでに伯母のコステロ夫人から手紙を貰っていた。その中で伯母はデイジーの放蕩ぶりを非難していた。実際にやって来て直かにデイジーの行状を聞かされるウィンタボーンは、しかし、彼女のことを他の人達と同じ感覚で以って非難する気にはなれない。それどころか彼の「アメリカ人性」はデイジーとその母の‘ignorant’でかつ‘innocent’なアメリカ人性と共鳴しこれを弁護する；“They are very ignorant—very innocent only. Depend upon it they are not bad.”⁹⁾

勿論ウォーカー夫人は在欧アメリカ人の代表者である。彼女もデイジーと対立する。彼女のデイジーへの批判の尺度は「こちらの習慣」に合うかどうかということである。「こちらの習慣」とは、言う迄もなく、ヨーロッパの生活習慣であり、その本質はヨーロッパ人達の眼を意識する在欧アメリカ人社会のエゴイズムである。そういう「俗物ではない」¹⁰⁾ウィンタボーンはここでもデイジーを弁護する。彼は「こちらの習慣」ばかりに迎合してはいない。ここにも彼の「アメリカ人性」の発現があると見なければならぬ。ウォーカー夫人宅でのパーティの席で、デイジーがこの女主人から受けた恥ずかしめのいきさつをウィンタボーンは見ていた：

Winterbourne was standing near the door; he saw it all. Daisy turned very pale, and looked at her mother... Daisy turned away, looking with a pale, grave face at the circle near the door; Winterbourne saw that, for the first moment, she was too much shocked and puzzled even for indignation. He on his side was greatly touched.¹¹⁾

ヨーロッパの中に自らの本性を見失なった「にせもの」達の集団からデイジーを救おうとするのはウィンタボーン一人であり、その原動力は彼の中に残っている「アメリカ人」への親和力に他ならない。恋する人達としてのこの二人の間には、しかし、実質的（肉体的）な交渉は遂になかった。あるのはデイジーを何とか理解しようとするウィンタボーンの側からの精神的な努力である。確かにデイジーの振舞は彼にとってさえ眼に余ることもあった。だが他の在欧アメリカ人達と違ってウィンタボーンは、彼女のそんな行動の中にも彼女なりの精一杯の自己主張を見ようと心を痛めたりもしたわけである。

ある夜帰宅の途中、ウィンタボーンは夜の Colosseum に遊ぶデイジーとジョヴァネリに出くわす。それは彼にはショッキングな光景であった。この女は全く尊敬に値しない女なのだと思えてくる。だが彼にはデイジーが憎めないどころか彼女が熱病に冒されることを恐れる。この「熱病」は一体何を意味するのだろうか。（ローマ熱はマラリアであるというのは答えにならない。）それは単にローマだけではなく、ヨーロッパ全体が何

百年の歴史のうちに培養してきたところの、文明の裏にはびこる因習という病原菌のことなのだ。¹²⁾これに冒されないうで欲しいと願うウィンタボーンのデイジーへの心配りは、そのまま彼の「アメリカ人性」が本能的に同国人に対して発した警告であったと見ることができる。¹³⁾

死の床にあってデイジーは母を通じてウィンタボーンに伝言する。Vevey での Chillon 城へのデートの楽しかったことと合わせて、自分はウィンタボーンの手配したようにはジョヴァネリとは婚約などしていなかった旨を。この婚約の不成立とデイジーの死の意味——それはアメリカとヨーロッパとの異質性の確認であり、安易に「ヨーロッパ」に同化しなかったデイジーの主体性 (identity と言ってもいい) の悲劇的な確認であるわけだ。

— 2 —

“I have lived too long in foreign parts.”¹⁴⁾これはデイジーを死に追いやったことに対して責任の一端を感じたウィンタボーンの手配である。ただ「長い」のではなく「長すぎた」との手配は、自らのうちになくしかけている「アメリカ人性」への回顧であると同時に、その反面において、自分の中に根付いてきている「ヨーロッパ人性」の手配でもあるわけだ。アメリカ人ウィンタボーンの中の「ヨーロッパ人性」の手配即ち「アメリカ人性」喪失の手配は、彼が如何にデイジーを理解し得なかったか、如何に他の在欧アメリカ人達と通じるところがあったかという形で問われるだろう。

デイジーはウィンタボーンと出会って間もない頃、彼に向って、あなたは本物のアメリカ人ですか、と尋ねたことがあった。彼の話し方がアメリカ的でなかったからである。それは単に話し方だけの手配ではなくて、彼のアメリカ人としての identity の喪失の象徴として読まねばならないだろう。実際、彼女とのやりとりのうちに、彼は自分がアメリカ的気風になじまなくなっていることを感じたのである。

He felt that he had lived at Geneva so long that he had lost a good deal; he had become dishabituated to the American tone.¹⁵⁾

他方、彼は相手デージーの中にも何かしら違和感を感じ、それを自分の長すぎたヨーロッパ暮らしの所為だと思う。デージーの人柄についての理解と判断を一層困難にしているのが他ならぬ彼のこの *identity* 喪失なのであり、ここには絶対的・固定的に付与されたものとしての言わば19世紀的な意味での *identity* など持ち得なくなった現代的な普通の人間の姿がある。それと同時に、そもそも他者を理解したり判断したりすることが普通の人間にとって如何に困難なことであるかという問題をも提起している。アメリカ娘は途方もなく無邪気なのだ、いや否だ、という世間的な評価の間で戸惑っているウィンタボーンの姿はそれだ。が、とにかく彼はこの急場を ‘pretty American flirt’¹⁶⁾ という formula¹⁷⁾ で以って一応切り抜ける。もちろんこれは真の解決ではない。‘pretty’ の持つプラス要素と ‘flirt’ の持つマイナス要素が反応せず、溶解しないままに混在しているだけである。そんなウィンタボーンをデージーの側から見れば ‘queer mixture’¹⁸⁾ ということなのだ。アメリカ人の眼に映る ‘queer-ness’ はアメリカ人性喪失の指摘である。

Chillon 城行き約束をした後帰って行くデージーを見送るウィンタボーンは、彼女の後ろ姿を ‘*tournure of a princess*’¹⁹⁾ と感じた。この部分は表現上は間接話法によってはいるが、‘*tournure*’ というフランス語は、作者と重なり合ったウィンタボーンの用語であると見るべきだろう。このフランス語の使用が、‘*princess*’ という語の連想させるヨーロッパ的雰囲気を一層強め、このことによって読者はウィンタボーンの中に定着しているヨーロッパ的な感じ方や発想を読み取るのである。のちに、デージーへの理解に苦しむ彼が自分自身を ‘*gallantry*’ という語を用いて評するところがある。²⁰⁾ この箇所も表現上は「全知」の視点による地の文ではあるが、問題の語の実質的な使用者はウィンタボーンであると取るのがまともな読み方であろう。これらの例から我々は、ウィンタボーンの長すぎるヨーロッパ生活が彼のものの感じ方の内に、如何に根深く影響を与えているかを知るのである。

デージーの恋愛遊戯の相手ジョヴァネリのことを ‘*imitation*’²¹⁾ と評した

ウィンタボーンは、当のデイジーについて‘well-conducted²²⁾’な女だとは言えない、という。判断の尺度に‘well-conducted’を持ち込む時の彼はウォーカ夫人的な、ヨーロッパ的慣習の人になっている。彼女を innocent とみたプラスの評価はこの瞬間には引っ込んでしまっている。

ウォーカ夫人の家でのパーティの席で、デイジーはウィンタボーンのことを二度までも‘too stiff²³⁾’と非難した。‘stiff’とは、道徳や因習に縛られて身動きのきかなくなった状態を指す。開放的なアメリカ娘にとってはまともな礼儀までも‘stiff’と思えるだろうが、しかし今彼女は彼を‘too stiff’と評したのだ。デイジーをヨーロッパの毒手から救いたい彼の純粹な動機とは別に、そうする為にもあの「こちらの習慣²⁴⁾」を持ち出さざるを得ない処に、この国籍喪失者の悲劇的なディレンマがある。ヨーロッパの習慣を以ってしかデイジーを諫めることができない自分に対して彼は実際躊躇いを感じてはいた。しかし、躊躇いつつも、言ってしまったことには責任が伴うわけである。

そして最後まで彼はデイジーを理解できなかった：

... he was vexed at his want of instinctive certitude as to how far her eccentricities were generic, national, and how far they were personal.

From either view of them he had somehow missed her, and now it was too late.²⁵⁾

ウィンタボーンはデイジーの生き方(=死に方)を否定も肯定もするだけの自信はない。この自信喪失を克服できないまま彼は「長すぎた」ヨーロッパ生活を依然長びかせている。彼の前途に「アメリカ人性」の回復の可能性などは残されていないのである。

— 3 —

ウィンタボーンは視点人物であると言われる。但しそれは大まかな意味に於いてであろう。その大まかさはどこから来るのであろうか。

この小説はスイスの Vevey という町の、客観的な「全知」の視点からの叙景で始まっている。が、次のページに突然‘I’なる語り手らしき人物が現われる。先の叙景がこの‘I’の視点からのものかと思って読み返して

みても、そうでもなさそうである。この‘I’が一般の人物と同等の役割を小説世界の中で演じるものではないことをその後間もなく読者は知らされるわけであるから、どうしてもこの‘I’は小説世界のドラマを外から見ている人間である。更にこの‘I’に紹介される形で登場するのが実質的な視点人物ウィンタボーンということになれば、ただ「視点」というだけでも話はかなり複雑であることが解る。

客観描写に続いてウィンタボーンを初めて作品世界に紹介するときの描き方を見てみよう。

I hardly know whether it was the analogies or the differences that were uppermost in the mind of a young American, who, two or three years ago, sat in the garden of the Trois Couronnes, looking about him, rather idly, at some of the graceful objects I have mentioned.²⁶⁾

この‘I’の出現の意味は何であろうか。正体不明の‘I’を作者ジェイムズと同一視することはできない、という指摘は、一つの警鐘になっている。²⁷⁾ そもそも作中の人物を取り上げて作者の影をそこに見ようとすることは実はたいへん危いことなのだ。全く無意味な努力に終わる場合さえあるだろう。だが今我々は、そういう一般論に耳を傾けながらも、当面の‘I’の出現の意味を探らねばならない。作家がどういう語り方で小説世界を展開しているかという一見技術的な事柄の中に、もしかして作家の文学思想との何らかの繋がりを解することができれば、それは興味あることに違いない。‘I’の出現には次のような例もある：

At the risk of exciting a somewhat derisive smile on the reader's part, I may affirm that with regard to the women who had hitherto interested him, it very often seemed to Winterbourne among the possibilities that, given certain contingencies, he should be afraid—literally afraid—of these ladies; he had a pleasant sense that he should never be afraid of Daisy Miller.²⁸⁾

これはウィンタボーンの内面についての報告であり、彼の無意識的な事象に関するものである。従ってこれを彼の自覚的な反省として描出語法を

以って描けない。他の人物を通して描くか客観描写しかない。ところが問題の状況は他の人物の知らない事柄に属しているから、残るのは客観描写ということになるが、ここでジェイムズは一工夫したのであろう。その意識的にか無意識的にか為した工夫の結果が'I'の出現ということだ。このとき純粋な「全知の神」の立場から描きおろすほどにはジェイムズは「高み」には居ない。「全知の作家(神)」は今や「人物の地上」に降りてきている。降りざるを得なかった歴史的思想的背景はあっただろうが、とにかくここには、不用意なものではあるが作家ジェイムズの人物世界への下降の一形式がある。(「不用意」とは'I'の出現が読者に与える唐突感への配慮が欠けているからである。)

次のような一節がある。

Her nephew, who had come up to Vevey expressly to see her, was therefore more attentive than those who, as she said, were nearer to her.²⁹⁾

これはコストロ夫人の内心に映るウィンタボーン像である。ここでの実質的な視点はウィンタボーンではなくコストロ夫人の方に移行している。視点の移動は、できるだけ全知の作家の介入を避けて人物同士でドラマを展開していこうとする小説のドラマタイゼーションの一つの現われである一方、視点人物の不統一という側面は免かれぬ。この作品にはこのような例が他にも見られ、確かに単一の視点という観点から見れば不統一である。これはジェイムズが単一の視点ということについて自覚的でなかったことの証拠にはなるが、しかし我々はここにもっと大きな意味即ち作家の「全知」離れと小説のドラマタイゼーションとの早い萌芽をこそ見るべきだろう。その意味でこれは上述の'I'がある種の発展を遂げたときの、作者による作品への無自覚的な介入のもう一つの形態であると言える。

ウィンタボーン以外の人物が視点になっていながら、尚その背後に彼の視点が重なっているような場面がある：

Then she (Daisy) paused again; she was close to the parapet of the garden, and in front of her was the starlit lake. There was a vague sheen

upon its surface, and in the distance were dimly-seen mountain forms. Daisy Miller looked out upon the mysterious prospect, and then she gave another little laugh.³⁰⁾

デイジーのしている光景はウィンタボーンも見ているだろう。引用中の“‘There was a vague sheen upon its surface, and in the distance were dimly-seen mountain forms.’”の部分は全くデイジーの視線の先の景色だが、この光景を見ているデイジーを更に後ろから見ているウィンタボーンの視線を読者が認めざるを得ないような描き方である。これは先の、無自覚的な視点人物を通しての作品の介入が更に一段階発展したときの一形式と見ることができる。

ウィンタボーンは元来物事を概念的に‘formula’として理解できないと落ち着かない性質の人物である。それだからこそ、彼にとってデイジーという人間は出会いの最初から一層不可解な存在だった。その不可解さに彼の心は揺らいた。アメリカ的なものとヨーロッパ的なものとの間で揺れている彼の存在形式と並行的に、ある判断とその否定との二つの極の間で彼の心は不安定に揺れている。この精神状況こそは「全知の作者」の支配から踏み出た生の人間の姿であり、こうした人物を描きだすために作家が無意識的にしる「全知」の立場を離れていったのは当然といえる。Chillon城への船の中でいただいたデイジーへの感想もその一例である：

He had assented to the idea that she was “common”; but was she so, after all, or was he simply getting used to her commonness?³¹⁾

ウィタボーンの反省を地の文の中へと描きだすこの描出話法の中に引き込まれるとき、読者はいやでも、その人物に重ねられた作者自身の影を見出すであろう。

マラリアの温床を夜遊びするデイジーへの警告は、‘sanitary point of view’から為された同国人への、嫉妬を越えた人間の声であった：

What if she *were* a clever little reprobate? that was no reason for her dying of the *perniciosa*.³²⁾

これは全知の高みにいる作者の声ではない。地上の人間の肉声である。この描出話法による表現の中に、ウィンタボーンの声に重ね合わされた作家自身の声を聞くのは自然なことである。

III

全知の作家は、いわば無自覚のうちに、'I'の形で人物の世界に下降した。そして、ある状況に於てある人物が別の人物の眼や意識を通過したものととして描き出される小説のドラマタイゼーションは、作品世界への作家の新たな介入のもう一つの形式であった。

アメリカ人でありながらヨーロッパ的でもある——或いは、アメリカ的でもヨーロッパ的でもなくなった——ウィンタボーンというキャラクターは、ある局面について今やかなりの程度にまで分化してしまった二つの文化的世界の緊張の上に成立している人間存在の形式であって、現代的な感覚から言えば、それは他者との相関的な関係に於てしか自らの位置を測ることができない現代人の像の予想となっている。勿論その像には、アメリカに生まれてアメリカを捨て、尚ヨーロッパにも十分な意味で同化しきれなかった作者ジェームズの姿がオーバーラップしている。

そういうウィンタボーンの使用はアメリカ及びヨーロッパから一定の距離を隔てて揺れている不安定構造の上であり、その疎外の感覚はもう一方では、「作者全知」の立場に安定できなくなってきた作家自身の、「全知」を離れて小説世界の中に身を置いたときの距離感でもある。ウィンタボーンの内省の描出の裏側に、この人物に託した作家の肉声を我々は確かに聞き取ることができた。

テキストとしては、ジェームズの作家的発展を忠実に辿る必要性から、初版に基くとされる Leon Edel 編集の *The Complete Tales of Henry James* 第四巻 (Rupert Hart-Davis, 1971) を使用した。

〔注〕

(1) cf. Leon Edel, *Henry James: The Conquest of London 1870-1883* (Rupert

Hart-Davis, 1962) p. 310

- (2) cf. Christof Wegelin, *The Image of Europe in Henry James* (Southern Methodist Univ. Press, 1958) p. 61
- (3) Louis Auchincloss, *Reading Henry James* (Univ. of Minnesota Press, 1975) p. 61
- (4) F. W. Dupee, *Henry James* (William Morrow & Company, 1974) p. 92
- (5) James Kraft, *The Early Tales of Henry James* (Southern Illinois Univ. Press, 1969) p. 92
- (6) テキスト143頁・176頁にも同様の例が見られる。
- (7) cf. S. B. Lejgjen, *American and European in the World of Henry James* (Kaskell House, 1971) pp. 15-16 Pelham Edgar, *Henry James: Man and Author* (Russel & Russel, 1964) p. 26
- (8) テキスト152頁
- (9) テキスト172頁
- (10) Christof Wegelin; *op. cit.* p. 62
- (11) テキスト192頁
- (12) Leon Edel, *Henry James* (Univ. of Minnesota Press, 1960) p. 18
- (13) James Kraft は前掲書91～92頁で、このときのウィンタボーンのアメリカ人としての責任を追究している。
- (14) テキスト206頁 (186頁に既に言及されている)
- (15)、(16)、(17) テキスト151頁
- (18) テキスト168頁
- (19) テキスト154頁
- (20) テキスト198頁
- (21) テキスト181頁
- (22) テキスト181頁
- (23) テキスト192頁で、デイジーは二度この語を使っている。
- (24) テキスト191頁 (ウォーカー夫人の言葉としては183頁)
- (25) テキスト198頁
- (26) テキスト142頁
- (27) Oscar Cargill, "Foreword" to R. L. Gale's *Plots and Characters in Henry James* (Archon Book, 1965)
- (28) テキスト193頁
- (29) テキスト155頁
- (30) テキスト160頁
- (31) テキスト168頁
- (32) テキスト202頁